

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 国定読み本における副助詞「くらい」と「ぐらい」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-06-15 キーワード (Ja): キーワード (En): Kokutei Tokuhon, adverbial particles, kurai, gurai, degree expression 作成者: 加藤, 安彦, KATO, Yasuhiko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00001364">https://doi.org/10.15084/00001364</a>

# 国定読本における副助詞「くらい」と 「ぐらい」

加 藤 安 彦

要旨：副助詞の「くらい」と「ぐらい」は、歴史的には名詞の位階を表す「位」という語から派生したものである。われわれは「くらい」も「ぐらい」もほとんど同じ語のように用いているが、これらの語に違いはないのであろうか。国語の標準を確立するのに大きく寄与したとされる『国定読本』のデータを用いて、一見違いがないように思われるこれらの語が担わされている役割を明らかにする。

キーワード：国定読本、副助詞、くらい、ぐらい、程度表現

Abstract: Historically, the adverbial particles *kurai* and *gurai* both derive from the same word *KURAI* (noun; meaning *grade, rank*). We use *kurai* or *gurai* as if there were no difference; in the same sentence, some use *kurai* and others use *gurai*. I will make clear the role of each word by using examples from *Kokutei Tokuhon*, elementary school readers used from 1904 to 1949 which greatly contributed to the standardization of the Japanese language.

Key words: *Kokutei Tokuhon*, adverbial particles, *kurai*, *gurai*, degree expression

## 1. はじめに

われわれがふだんの生活で目にする程度表現のひとつに副助詞「くらい」を用いたものがある。位階を表わす「位」が助詞的に使用されるようになつたものとされるが<sup>(注1)</sup>、注意してみると、「くらい」と同様に「ぐらゐ」という形式も用いられていることがわかる。文学作品を例にとると、

- 熱は間もなく下がり、風邪も一週間くらゐで癒るにはなほつたが、
- 鼻の下に短い髭を生した三十ぐらゐの男の立姿である。

(ともに『黒髪』近松秋江、1922年)

というように「くらい」・「ぐらゐ」双方が出現している。

また、会話などにおいても双方が入り交じって使用されているようである。発話データそのものではないが、複数の人物による会話を文字におこした資料を例にとって以下に示す。

- BC二〇〇〇年くらいから森林がへりはじめ、さらに今から一五〇〇年前ぐらゐを境に森林の非常な減少が起つた。
- バナナの上限は二〇〇〇メートルくらいだ。
- 豎穴の中から長さ一六センチくらいの炭化したパンが見つかった。
- 一五〇種くらいは覚えていないと、山を歩いたときシダの名前をすらすらとは言えない。
- 五〇年くらいのことでしょう。
- 大体一〇〇〇メートルから一五〇〇メートルくらいの山岳部です。
- ちょうど南はジャワくらい、北はシナ、日本という伝播をした
- それがおよそAD四五〇年ぐらいまで続く。
- 照葉樹林のところを一週間ぐらゐ、馬に乗って首府へ行く道をたどつた。

(『照葉樹林文化』上山春平編、中公新書、1969年)

一番目の例では同一文中に「くらい」・「ぐらい」双方が出現している。先に挙げた『黒髪』の例では「一週間」に「くらい」がついているが、上記最後に挙げた例では「ぐらい」が接続している。また、標高について述べている表現では、「メートル」に続いて「くらい」・「ぐらい」どちらも現われており、年号については「BC 二〇〇〇年くらい」、「AD 四五〇年ぐらい」と、双方が接続している。

こうした目についた例だけをみる限りでは、「くらい」と「ぐらい」に違はないように思われる。では、「くらい」と「ぐらい」の違いとは語形式の違いだけということなのだろうか、意味・用法に違いはないのだろうか。これが本稿のそもそもの出発点である。

副助詞「くらい」について述べたものはいくつかあるが、まとめた数の用例を集めて「くらい」と「ぐらい」の違いについて述べたものは少ない<sup>(注2)</sup>。

また、根来 [1967] によれば、「くらい」と「ぐらい」について「この清濁は各個人の口ぐせによると思われる。」とし、本質的な違いはないという見解を示している。

本稿では、十分な量の均質な言語資料からまとめた数の用例を得て、その上で「くらい」と「ぐらい」の違いを考察したいと考え、対象資料として国定読本を選んだ。これは、国定読本が現代語に少なからぬ影響を与え、日本語の標準を確立するに力あったとされており、これを対象として、逆に現代語の基礎部分における「くらい」と「ぐらい」のお互いの位置づけを探ることができるのでないか、と考えたからである。また、その編集に多数の人物が一定の方針によって関わったということは、文学作品のように一個人のことばに対する癖や好みの反映といったことが少なく<sup>(注3)</sup>、いうなれば「没個性化」した資料、表現や語の選択に偏りの少ない資料と考えられ、その「没個性化」によって、その時のもっとも中立的な表現や用法をつかめるのではないかと考えたからである。

## 2. 調査対象について

本稿では「くらい」・「ぐらい」を含む全用例において、その前後につく語についても検討することにしたため、「て～ん」の部がまだ出ていない第六期国定読本用語総覧（以下単に「総覧」とする）は対象からはずすことにした。よって調査対象としたのは、第一期から第五期の国定読本である。

国定読本第一期から第五期までの本文中に「くらい」もしくは「ぐらい」が出現するのは全部で169例あり、そのうち4例は「位」と漢字表記されている例である。

この漢字表記された「位」はすべて同一期、国定読本第二期中に出現した例である。これらの例にはルビも振られておらず、総覧上では「ぐらい」と読みを与え、見出し「ぐらい」の下に並べているが、これは編集の都合によるところが大きい。

第二期国定読本に対する「尋常小学読本編纂趣意書」（「近代日本教科書教授法資料集成 第十一巻 編纂趣意書1」所載）にも、それを「ぐらい」と読むか、「くらい」と読むかという判断は示されていない。「位」という漢字に対する読みそのものは「くらい」として新出の時点で与えられている。編纂趣意書の読替漢字表には新出の時の読みと異なる音訓が現れた時にそれを載せるが、連濁するような場合の音についてはわざわざ載せることがない。よってこの場合、「くらい」と読むか「ぐらい」と読むかという判断はつかない。判断のつかぬものは除外することとして、ここでは「位」の4例を対象からはずし、全部で165例についての調査を行った<sup>(注4)</sup>。

また、ここでは国定読本と同時期に出版された辞書において、「くらい」・「ぐらい」の記述がどのようになされているかについても併せ報告する。

## 3. 国定読本に現われることば

国定読本は国語の標準を示すために主として東京の中流社会に行われていた表現を取り入れて作られたとされており、第一期国定読本の編纂趣意書には、

「文章ハ口語ヲ多クシ用語ハ主トシテ東京ノ中流社会ニ行ハルルモノヲ取りカクテ国語ノ標準ヲ知ラシメ其統一ヲ図ルヲ務ムルト共ニ出来得ルタケ児童ノ日常使用スル言語ノ中ヨリ用語ヲ取りて談話及綴り方ノ應用ニ適セシメタリー以下略一」（第一期　尋常小学読本編纂趣意書「第二章　形式」：「近代日本教科書教授法資料集成　第十一卷」所載）

とあり、また第二期国定読本の編纂趣意書には、

「口語ハ略東京語ヲ以テ標準語トセリ。一中略一国語読本ハ一方ニ於テ国語統一ノ実効ヲ挙ゲントスルモノナレバ、一以下略一」（第二期　尋常小学読本編纂趣意書「第三章　言語及ビ文章」：同上所載　以下「編纂趣意書」、「修正趣意書」についての引用はすべて同書による）

と記されている。分量の増加、漢字の提出学年の異同などはあるが、第三期以降も基本的な姿勢は変わっていない。したがって、ここに現われている表現は国語の標準として考えるべきことばの用い方、意味を担わされているといつてもよいだろう。

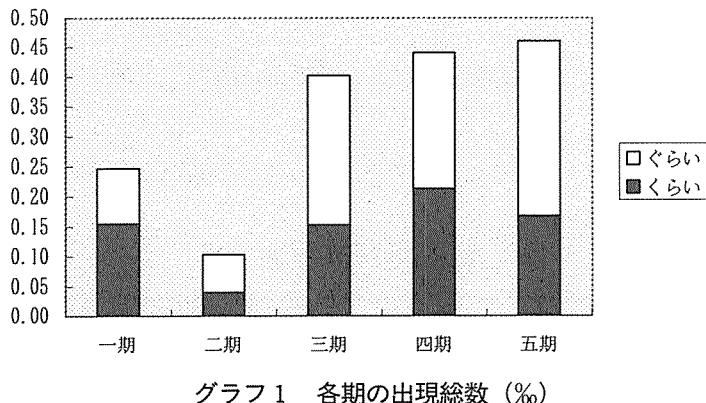
では、「くらい」・「ぐらい」が国語の標準の表現としてどのように扱われているか、あるいは第一期から第五期までの時間的な流れに伴うなんらかの変遷がみられるかどうか調べていくことにする。

#### 4. 総数の変化

まず、「くらい」・「ぐらい」の総数がどのように変化しているかをみてみる。表1は、第一期から第五期までの期別の「くらい」・「ぐらい」の出現総数と各期の延べ語数<sup>(注5)</sup>を表している。また、「対延べ語数比」は、各期の延べ語数に対する「くらい」・「ぐらい」の出現の割合を千分率（‰）で表したものである。この千分率をグラフにしたもののがグラフ1である<sup>(注6)</sup>。

表1 期別出現総数

	くらい	対延べ語数比	ぐらい	対延べ語数比	総観延べ語数
一期	5	0.15	3	0.09	32362
二期	3	0.04	5	0.06	77358
三期	14	0.15	23	0.25	92010
四期	26	0.21	28	0.23	122429
五期	21	0.17	37	0.29	126033
合計	69	0.15	96	0.21	450192



グラフをみてわかるように、第二期でいったん落ち込むが<sup>(注7)</sup>、全体としては時代が下るにつれて増加の傾向にあることがうかがえる。

また、第一期・第二期と第三期以降との間での増加率が高いこともわかる。その理由としては、第三期国定読本の修正趣意書（第三期には編纂趣意書はない）に述べられているように、分量の増加が影響を及ぼしていると考えてよさそうである。

それぞれの変化に注目すると、「くらい」に比べて「ぐらい」のほうが時代を下るにつれて増加傾向にあることがわかる。

次に「現代語の助詞・助動詞一用法と実例一」(国立国語研究所報告3, 秀英出版, 1951 以下「現代語の助詞・助動詞」と略す。)に挙げられている「くらい」の分類によって国定読本に現れた165の文例を分類してみることにする。

この分類は、

- 1) おおよその分量・程度を表わす。
- 2) ある事がらを例示し, それによって, 動作や状態の程度を示す。
- 3) 程度を表わす際, 比較の基準を示す。  
[～くらい～はない]
- 4) ある事がらを例示し, その程度を弱い・軽いものとして扱う。  
[～くらいなら]

という四つの分類(以下この分類を単に「分類」とよぶ)からなり、「くらい」あるいは「ぐらい」が, 文中でどのような意味, 役割を担わされるかに注目したものである。

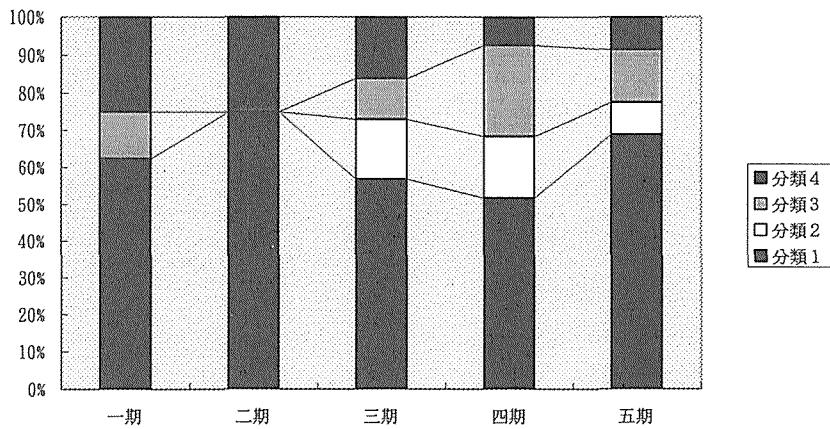
表2は「くらい」・「ぐらい」の総数を各期ごとに上記四つの「分類」によって分けたものである。

表2 期別分類比率

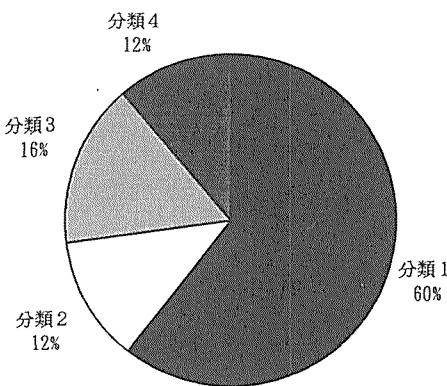
	一期	二期	三期	四期	五期
分類1	5	6	21	28	40
分類2	0	0	6	9	5
分類3	1	0	4	13	8
分類4	2	2	6	4	5
合計	8	8	37	54	58

これを各期の合計に対するそれぞれの「分類」の割合を算出してグラフにまとめると以下のグラフ2になる。

また, 全期を通じた総数によって「分類」ごとの出現比率を円グラフにまとめたのがグラフ3である。



グラフ2 総数の期別分類比率



グラフ3 総数の分類別比率

グラフ2をみると、第一期、第二期に比べ、第三期以降には「分類」にバリエーションがみられるようになることがわかる。また、グラフ3によって全体を通してみると、おおよその分量・程度を表わす「分類」1が半数以上を占めており、「分類」2, 3, 4はそれぞれほぼ同程度の出現率となっている。

第三期国定読本の修正趣意書（第三期には編纂趣意書はない）に、以下の記述がみられる。

「分量ノ増加ニ伴ナヒ、教材モ自然ニ増加シタルヲ以テ、一中略一特ニ左ノ種類ノ教材ヲ増加スル計画ヲ立テタリ。」

一、児童ノ日常生活ニ関スルモノ。

一、田園趣味ヲ養成スペキモノ。

一、理科及ビ実業ニ関スルモノ。

一、経済及ビ公民ノ心得ニ関スルモノ。

一、国勢ノ現状、世界ノ事情ニ通ゼシムベキモノ。」（第三期尋常小学読本修正趣意書「第三章 教材ノ選択 一」）

第一期、第二期においても同様の分野に関する教材が扱われてはいるが、童話、神話、諺などを扱うものが目立つ。

第三期以降はこうした教材の増加と内容の拡充とによって表現が多様化したことが、グラフ2の示している第三期以降での「分類」の多様化とつながっていると考えられる。

## 5. 同時期の辞書記述について

ほぼ同時期の辞書として記述を調べたのは以下の五種類の国語辞書である。

日本大辭書（明治二十九年五月一日 第七改版、山田美妙、明法堂）

言海（明治三十一年二月 第四十一版、大槻文彦）

ことばの泉（明治三十一年版：昭和五十四年復刻、落合直文、ノーベル書房）

廣辭林（昭和十四年十月十日 新訂携帯六百版，金澤庄三郎編，三省堂）

明解國語辭典（昭和二十二年四月五日 十版，金田一京助編，三省堂）

第一期の国定読本は明治三十七年より使用され，第五期は昭和十六年より使用されたので，その前後の時期の国語辞典ということになるが，それらの上ではどのような記述がなされているだろうか。

古い順に記述をみていく。

### 【日本大辭書】

見出し語=くらゐ（名詞の「くらゐ」とは別に立っている）

品詞=接尾

記述=「他ノ語ニ附属シテ副詞體ヲナシ，物ノ程度ヲ示ス語。」

用例は1例挙がっているが，「ぐらゐ」が用いられている。

### 【言海】

見出し語=くらゐ（名詞の「くらゐ」とは別見出し）

品詞=接尾

記述=「他語ニ属キテ副詞トナル接尾語。ホド。ダケ。バカリ。」

用例は，短いものが5例挙がっている。国定読本では第五期にならないと出現しない指示代名詞を用いた例や連体詞を用いた例も挙がっている（「コレ一，アル」「コノ一，残ル」）。ただし，「一」で表されている部分が「くらい」であるか「ぐらい」であるかは判断がつかない。

### 【ことばの泉】

見出し語=くらゐ（名詞の「くらゐ」とは別見出し）

品詞=接尾

記述=「位。ほど。ばかり。だけ。俗語。」

用例には，やはりこれも短いものが挙がっている。指示代名詞を用いた例

（「どれぐらゐ」）と数表現を用いた例（「大き一尺ぐらゐ」）の2例だけだが、双方とも「ぐらゐ」を用いている。

### 【廣辭林】

見出し語=一くらゐ（名詞の「くらゐ」とは別見出し）

品詞=接尾

記述=「ほど。だけ。」

用例は、1例だけ。連体詞を用いた例（「あの一」）。

### 【明解國語辭典】

見出し語=一くらゐ（名詞「くらゐ」とは別見出し）

品詞=接尾

記述=「ほど。だけ。凡そ。」

用例はなし。

ここで注目したいのは、明治中期の段階ですでに国語辞書に「くらい」が接尾語あるいは接尾辞として立てられており、用例にも連体詞に接続する例、指示代名詞に接続する例が早くもみられるということである。

湯澤〔1960〕によれば、指示代名詞を伴った「くらい」あるいは「ぐらい」の表現は明治に入ってから生じたものであろうとしており、現代語の「くらい（ぐらい）」を扱っている倉持〔1978〕でも同様のことが述べられている。

このことからすると、明治中期までに日常会話などの口語においてはすでに指示代名詞を伴った表現が使われていたと考えられる。ほぼ半世紀後の第五期になるまで国定読本がこうした表現を採用しなかった理由としては、「ことばの泉」の記述に「俗語」とあるように、本来は「くらい」が「ほど」「ばかり」「だけ」に比べ、俗語的な表現だという意識があったことが挙げられよう。

「ほど・ばかり・だけ」と「くらい・ぐらい」とがまったく同じ意味を持

つわけではないが、ある用法ではほぼ同じ意味を持って重なる。国定読本において「ほど・ばかり・だけ」の中で比較的多く出現している「ほど」について、ここで「くらい」・「ぐらい」との比較を行ってみる。

「ほど」と「くらい」・「ぐらい」とのもっとも意味の近い用法として考えられるのは、「分類」の1にあたる、数を伴う表現である。それ以外では意味や用法が異なり、両者の単純な比較はできないため、数を含む表現に限って比較をしてみる。

ちなみに、副助詞「ほど」の出現数と数を含む表現の出現数は以下のとおりである。

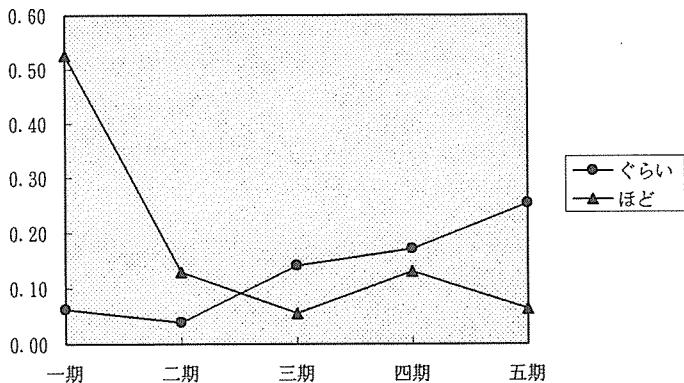
	出現総数	数を含む表現
一期	26	17
二期	54	10
三期	59	5
四期	127	16
五期	119	8

国定読本では、文学作品や発話を文字におこした資料と異なり、数を含む表現には「ぐらい」だけしか出現しなかった。

それぞれの期の延べ語数に対する「ぐらい」・「ほど」の各期出現数の比率を千分率で表したもののが表3で、それをグラフにしたのがグラフ4であるが、ここからわかることは、数を含む表現において「ほど」は期を追うごとに減

表3 数を含む表現「ぐらい」と「ほど」(%)

	ぐらい	ほど
一期	0.06	0.53
二期	0.04	0.13
三期	0.14	0.05
四期	0.17	0.13
五期	0.25	0.06



グラフ4 「ぐらい」と「ほど」の数を含む表現 (%)

少傾向にあるのに対し、「ぐらい」は増加傾向にあるということである。

第三期国定読本修正趣意書に述べられているように、日常生活や実業といった分野への教材拡充により、日常語的な「ぐらい」の出現頻度が上がったと推測される。

また、同修正趣意書には、口語文の増加を企図し、その割合を上げたということも述べられている。第四期・第五期とともに口語文の割合を増やしていくことが、やはりそれぞれの編纂趣意書に記されている。この口語文の増加ということも「俗語」的であった「ぐらい」の増加をもたらし、よりフォーマルな表現ともいえる「ほど」にとって代わることにつながったといえそうである<sup>(注8)</sup>。

## 6. 「くらい」と「ぐらい」の「分類」別出現数

では、個別に「くらい」と「ぐらい」とがどのように出現のしかたが異なるか、について述べていく。

表4は「くらい」と「ぐらい」の「分類」別の出現数と総出現数に対するそれぞれの「分類」の比率を百分率で表したものである。表4での対総数比

をグラフにしたものがグラフ5である。

それから判断すると、「くらい」は「分類」の1から4までバランスのとれた出現をみせるが、「ぐらい」は「分類」1に大きく偏って出現している。「ぐらい」はおよその程度や分量を表わす用法がその四分の三を占めている。

表5は表4の出現数の期別の内訳を求めたもので、それをそれぞれグラフ

表4 分類別の総数と比率

	くらい	対総数比%	ぐらい	対総数比%
分類1	27	39.13	73	76.04
分類2	19	27.54	1	1.04
分類3	12	17.39	14	14.58
分類4	11	15.94	8	8.33
合計	69	100	96	100

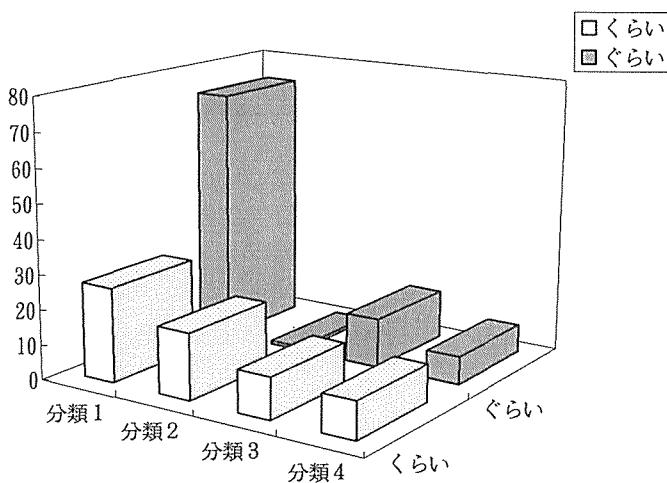
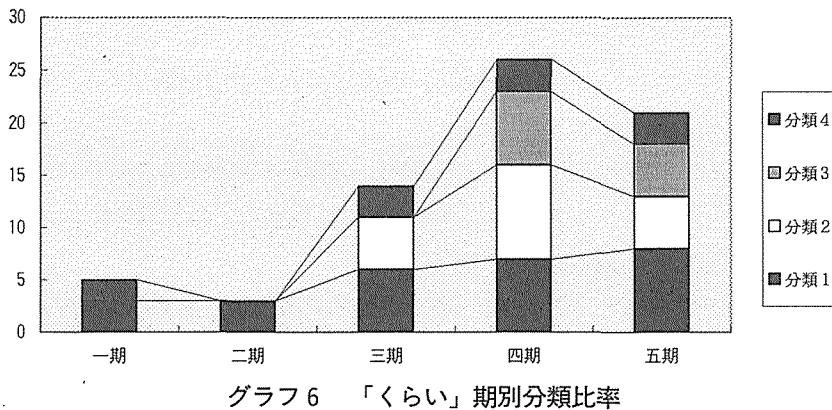


表5 期ごとの分類別出現数

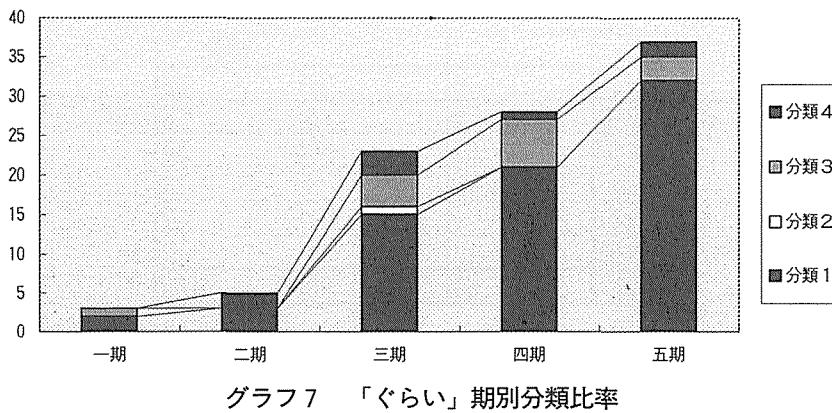
		くらい	ぐらい	合計
一期	分類1	3	2	5
	分類2	0	0	0
	分類3	0	1	1
	分類4	2	0	2
二期	分類1	3	3	6
	分類2	0	0	0
	分類3	0	0	0
	分類4	0	2	2
三期	分類1	6	15	21
	分類2	5	1	6
	分類3	0	4	4
	分類4	3	3	6
四期	分類1	7	21	28
	分類2	9	0	9
	分類3	7	6	13
	分類4	3	1	4
五期	分類1	8	32	40
	分類2	5	0	5
	分類3	5	3	8
	分類4	3	2	5

にしたもののがグラフ6およびグラフ7である。

二つのグラフを比べてわかるのは、総数の「分類」別比率で、第三期以降の「分類」にバリエーションが現われたのは主として「くらい」の表現の多様化であるということである。「ぐらい」はむしろ期が下るにつれて「分類」1の割合を高めているといえる。このことは、国定読本において、「くらい」が副助詞としての表現の多様化のために用いられ、「ぐらい」はもっぱら数を含むようなおおまかな程度や分量の表現に用いられるようになったということを意味している。すなわち、両者は別々にそれぞれの役割を果たしている、



グラフ 6 「くらい」期別分類比率



グラフ 7 「ぐらい」期別分類比率

ということがここでいえる。

## 7. 「くらい」と「ぐらい」の前にくる品詞

ここで、副助詞「くらい」・「ぐらい」について今までに論じたものが触れているように、それぞれがどのような品詞の語に従って出現しているかについて述べる。

「くらい」・「ぐらい」の前に出現する語（以下前接語とよぶ）の品詞として、本稿では総覽に記述されている品詞を用いることにした。ただし、前接

語が名詞、形容詞、連体詞、動詞、副詞以外のものである場合は「その他」とした。

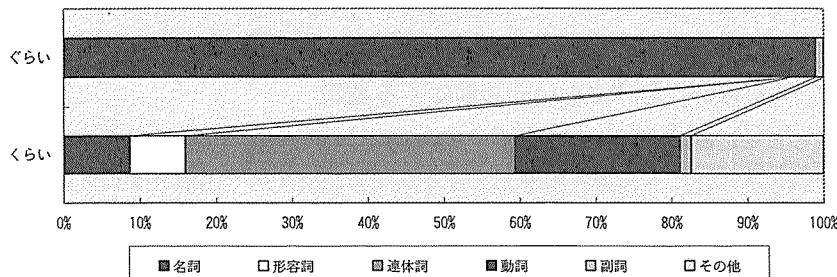
まず、「くらい」・「ぐらい」の品詞別の総数をまとめたのが表6で、それをグラフにしたもののがグラフ8である。

森田[1968]に述べられていたのと同様、連体詞が前接語となる例は国定読本でも「くらい」だけであった。「ぐらい」はほとんどが名詞である。「くらい」ではむしろ名詞は少数派である。

では、期別にみると出現数はどうなっているだろうか。表7がそれであるが、「ぐらい」の前接語は動詞が第二期と第三期とで3例、副詞が第二期に1例あるだけで、第四期、第五期では名詞のみである。これをグラフにしたの

表6 品詞別出現数

	くらい	ぐらい	総数
名詞	6	92	98
形容詞	5	0	5
連体詞	30	0	30
動詞	15	3	18
副詞	1	1	2
その他	12	0	12
合計	69	96	165



グラフ8 前接語の品詞比率

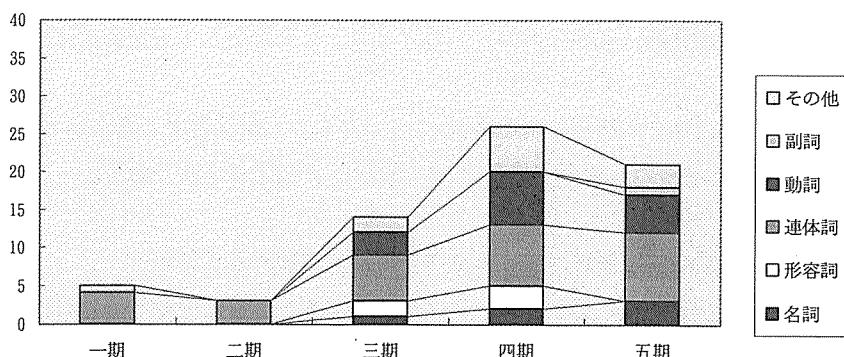
がグラフ9、グラフ10である。

「くらい」の前接語の期別の変化は、繰り返しになるがやはり第三期以降にバリエーションが出ている。そして特徴的であると思えるのは、全期を通じて連体詞を前接語とする表現が出現していることである。

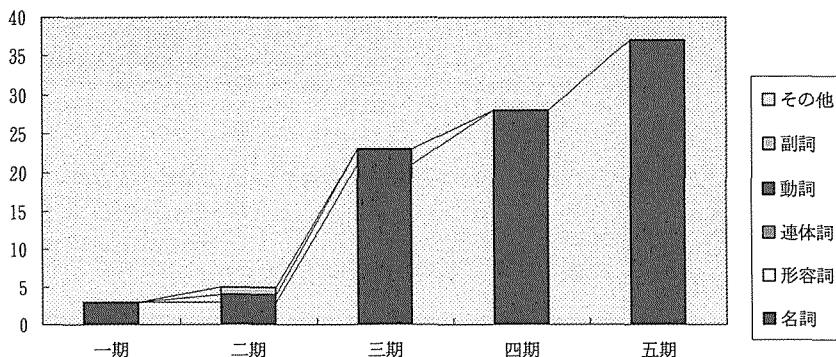
「ぐらい」についてはほとんどが名詞を前接語として「くらい」との棲み分けが図られているといえる。

表7 期ごとの品詞別出現数

		一期	二期	三期	四期	五期
くらい	名詞	0	0	1	2	3
	形容詞	0	0	2	3	0
	連体詞	4	3	6	8	9
	動詞	0	0	3	7	5
	副詞	0	0	0	0	1
	その他	1	0	2	6	3
ぐらい	名詞	3	3	21	28	37
	形容詞	0	0	0	0	0
	連体詞	0	0	0	0	0
	動詞	0	1	2	0	0
	副詞	0	1	0	0	0
	その他	0	0	0	0	0



グラフ9 各期の「くらい」前接語品詞別出現数



グラフ 10 各期の「ぐらい」前接語品詞別出現数

## 8. おわりに

以下に副助詞「くらい」・「ぐらい」について、国定読本の調査結果をまとめる。

### ○「くらい」と「ぐらい」の役割分担

- 1) 「くらい」の現われ方は「分類」1から4までの意味・用法の異なる表現にも偏りなく現われる。
- 2) 「ぐらい」の現われ方は「分類」1においてもっとも顕著で、おおよその分量・程度を表現する場面で多く用いられる。

### ○前接語

- 1) 連体詞「この・あの・その・どの」を前接語とする場合には、あとに「くらい」が続く。
- 2) 名詞を前接語とする場合には、「ぐらい」が接続する場合が多い。
- 3) 「ぐらい」での前接語の95パーセント以上は名詞である。

### ○数を含む表現

- 1) 数を含む表現にはすべて「ぐらい」が使われている。
- 2) 国定読本においては、日常生活や実業といった分野への教材の拡充により、また、日常使用する口語を採用するという観点から「ほど」にとて代わって「ぐらい」の使用率が上がった。

これらの点を総合すると、国定読本においては「くらい」と「ぐらい」はどちらを使ってもよいという、あいまいな使われ方ではないことがわかった。編纂趣意書などに明記されてはいないものの、前接語の種類、「分類」にみるような意味・用法の点からも、国定読本における「くらい」と「ぐらい」は、はつきりとした区別のもとに使用されているようである。

## 注

- 1 此島 [1966] によれば、助詞としての「くらい」の成立は江戸時代に入ってからであるとされる。また、湯澤 [1960] では、江戸時代の用例についての説明で、「くらい」および「ぐらい」の前に接続する語の文法的な分類によってその出現のしかたの違いを論じている。
- 2 副助詞としての「くらい」・「ぐらい」について論じたものには、総覽と立場の違うものがいくつかある。  
橋本 [1969]、森田 [1968] では、副助詞の場合の代表語形式を「ぐらい」としている。森田 [1968] では、さらに、大正・昭和の短編小説および新聞・雑誌から収集した用例中には連体詞に接続するものとして「くらい」のみが出現したとし、「それ自体評価の基準点を指示する概念が抽象的ではあるが認められる」ということから、連体詞に接続している「くらい」を名詞と考えることが述べられている。  
本稿では総覽に立てられている見出し語とその品詞に基き、「くらい」・「ぐらい」双方を二つの見出し語として同等に扱い、総覽上で連体詞に接続するものも含め、副助詞としてあるものすべてを副助詞として扱った。
- 3 たとえば、坂口安吾『白痴』では、「くらい」1例に対して「ぐらい」が17例現われているが、川端康成『伊豆の踊子』では、「くらい」5例に対し、「ぐらい」は出現例がない。
- 4 調査には、総覽と機械可読化された国定読本本文データを用いた。
- 5 総覽の第1巻、第3巻、第5巻、第7巻、第9巻にそれぞれの期の用例数が載せられており、それを延べ語数と考えてよいが、各巻の刊行後に再調査したところ若干数値にちがいがあった。ここではその修正値を用いた。
- 6 第二期「ぐらい」の出現数は5としてあるが、総覽上の出現数は漢字表記された「位」の例があるので9となっている。グラフ上、総数で4例少ない。
- 7 第二期に出現した漢字表記の例をはずしたことが影響してはいるが、それを加味したとしても若干数値が落ち込むようである。

8 ただし、副助詞「ほど」は、

	出現総数	対延べ語数比 (%)
一期	26	0.80
二期	54	0.70
三期	59	0.64
四期	127	1.04
五期	119	0.94

と、第一期から第三期にかけては減少しながら第四期で増加し、第五期で若干の減少をみせている。よって、「くらい」・「ぐらい」の「分類」1以外の意味・用法、「くらい」・「ぐらい」と置き換え不能な用例が増加傾向にあるといえそうである。

## 参考文献

- 国立国語研究所 国語辞典編集資料 1～9 「国定読本用語総覧 1～9」
- 国立国語研究所：国立国語研究所報告 3 「現代語の助詞・助動詞—用法と実例—」，秀英出版，1951
- 仲新・稻垣忠彦・佐藤秀夫編：「近代日本教科書教授法資料集成」第十一巻，昭和五十七年九月一日，東京書籍
- 倉持保男：「くらい（ぐらい）<現代語>」；松村明編「古典語現代語助詞助動詞詳説 第三章副助詞」，学燈社，1978 四版
- 此島正年：「国語助詞の研究—助詞史の素描—」，桜楓社，1966
- 此島正年：「助動詞・助詞概説」，桜楓社，1983
- 武田蓉子：「副助詞「だけ、ばかり、くらい、ほど、きり、しか」の意義素」〔国語研究（山形大学）21〕，1970
- 根来司：「副助詞ばかり〈古典語・現代語〉だけ・くらい・きり〈現代語〉」；〔国文学 12-2〕，学燈社，1967
- 橋本進吉：「助詞・助動詞の研究（講義集三）」，岩波書店，1969
- 蜂谷清人：「特集 日本語における助詞の機能と解釈—副助詞 し・しも・のみ・ばかり・まで・など <だけ> <くらい> <ほど>」；〔解釈と鑑賞 35-13〕，至文堂，1970
- 森田良行：「「ぐらい、ほど、ばかり」の用法」〔早稲田大学語学教育研究所紀要 7〕，1968
- 山田正紀：「江戸言葉の研究—浮世風呂・浮世床の語法—」，普通教育研究会刊，1936
- 湯澤幸吉郎：「増訂江戸言葉の研究」，明治書院，1960 増訂再版

## 用例

最後に今回使用した国定読本の用例をすべて挙げる。

「くらい」・「ぐらい」の出現箇所の前には「▼」を挿入してある。

用例に付されている情報は順番に以下のとおり。

例：○ 112 連 「用例本文」

○ 「くらい」の用例であることを示す

● 「ぐらい」の用例であることを示す

112 3 衔の数字は、百の位が期を、十の位が学年を、一の位は、1 が上巻、  
2 が下巻を表す。112 なら、第一期第一学年の下巻を意味する。

連 「くらい」、「ぐらい」の前接語の品詞を表し、この場合は連体詞を意味  
している

文中の@K1 は、本文中のオドリ記号を表わす。

品詞の略称は以下のとおり

名 名詞

形 形容詞

動 動詞

連 連体詞

副 副詞

上記以外 他

○ 112 連 コノ▼クラキナ コト デハ ナキマセン。

○ 141 他 ぬれさせる▼くらゐなら、いっしょに、ぬれます。

○ 141 連 コノアガッタリ、サガッタリシタノヲ、度ニアハセテ、見ルト、ド  
ノ▼クラヰ、暑イカ、

○ 141 連 ドノクラヰ、暑イカ、ドノ▼クラヰ、寒イカガワカリマス。

○ 142 連 郵便のお話は、まー、この▼くらゐにしておきませう。

○ 221 連 コンナニノビテ、私ノセイトオナジ▼クラヰニナリマシタ。

○ 241 連 武士としてはあの▼くらゐな馬をもつて見たい。

○ 241 連 モシ手ガナカツタラ、ドノ▼クラヰ不自由デセウ。

○ 321 連 どちらもたいていおなじ▼くらゐで、かちまけは

○ 322 形 をぢさんのうちでは、には一ぱいもみがほしてあつて、足のふみば  
もない▼くらゐでした。

- 341 動 あなたから一文でももらふ氣がある▼くらゐなら、此所まで持つて來はしません。
- 351 動 又季節ニヨツテカハル▼クラヰデナク、何時デモマハリノ物ノ色ガカハレバ、間モナクソレト似タ色ニカハルモノモアル。
- 351 連 暑さも年中此の▼くらゐのものださうで、かねて思つてゐたとは違ひ、なか@K 1住みよいところのやうです。
- 352 動 こちらへ來てもう三月餘りになりますが、よくも續くと思ふ▼くらゐの天氣續きで、雨といふものはごくたまにしか降りません。
- 352 連 大分長くなりましたから、今日は此の▼くらゐにして置きます。
- 352 連 三日四日續いて寒ければ、其の次には又其の▼くらゐの間暖かさが續くといふやうに、寒さと暖さがほとんど規則正しく交替することです。
- 352 連 残念でたまらなくなつたので、何此の▼くらゐの事がこはいものかと、自分から先に立つて渡つたのです。
- 361 形 貨幣・紙幣なくして一日も生活することは出來ぬといつてもよい▼くらゐである。
- 361 名 一番早く伐るとしても、其の時は僕がおとうさん▼くらゐの年になつてゐるわけだ。
- 361 連 今に御らん、此の▼くらゐ離して植ゑても、十五六年目には間伐をしなければならないやうになるから。
- 362 他 身には色目も見えぬ破れ衣をまとひ、日にやけ仕事にやつれて年の頃もよくわからぬ▼くらゐであるが、きつと結んだ口もとには意志の強さが現れてゐる。
- 362 他 三人の心はもう驚と感激で一ぱいになつて、唯ぼうつとして、ひき終つたのも氣附かぬ▼くらゐ。
- 421 名 「その大きなばけものは、わたし▼くらゐもあったかね。
- 421 連 「では、この▼くらゐかね。
- 421 連 大きいのがじまんの大蛙は、うんといきを吸ひこんで、おなかをふくらませて、「そんなら、この▼くらゐもあったかね。
- 422 形 庭一パイモミガホシテアッテ、足ノフミバモナイ▼クラヰデシタ。

- 431 名 水は深くて、大きながらだが、半分▼くらゐはかくれました。
- 432 他 夕方は大變な人出で、兩がはの歩道は、ちょっと歩けない▼くらゐだ。」
- 432 動 ちやうど、目がねの玉がはまる▼くらゐの大きさに巻いて、其の一方
- 432 動 さうして、さつきの筒の中へ、ちやうど、それがする@K 1とはいる▼くらゐの大きさに作つて、それをのりづけにした。
- 432 連 「おとうさん、もう、どの▼くらゐ積つたでせう。
- 441 形 大川をめぐらした眺は大阪らしい景色で、其のまゝの水の公園といつてよい▼くらゐです。
- 441 他 後には甲板の人々の顔も、はつきり見えない▼くらゐになりました。
- 441 動 あなたから一文でももらふ氣がある▼くらゐなら、こゝまでわざ@K 1
- 441 連 高さはどの▼くらゐあらうか。
- 442 他 汽車や自動車もかなはぬ▼くらゐの速さですから、幾百糠の海を一氣に飛ぶことも、決して不思議ではありません。
- 451 形 鳩より少し小さい▼くらゐの大きさですが、全體が濃い緑色で、頭が黒く、
- 451 動 たまさか、大きなサボテンがある▼くらゐのものです。
- 451 連 此の▼くらゐあいきやうのある氣のきいた蟲は、めつたにないものだ。
- 452 他 少しばかり背が低くなつた▼くらゐです。
- 452 動 荷車に蒸氣機關を裝置したやうなもので、速度もおそく、人の歩く▼くらゐの速さに過ぎなかつた。
- 452 連 」と、一人の官女が申しますと、「其の▼くらゐと、私も思ひます。
- 461 他 三人の心はもう驚と感激で一ぱいになつて、唯ぼうつとして、ひき終つたのも氣附かぬ▼くらゐ。
- 461 動 時々島が見える▼くらゐのものでした。
- 461 動 狹い道の兩側には、大きな笹〔さゝ〕が僕等の頭をおほふ▼くらゐ高く茂つてゐた。

- 462 他 とうろうの色鮮かに、江上に影をうつすさまは、畫にもかきたい▼くらゐである。
- 462 連 ほんたうにさうした不法行爲があつたかどうか、若しあつたとすれば、どの▼くらゐの損害賠償をさせるのが適當であるかを判断せねばならぬ。
- 462 連 なに、此の▼くらゐ何でもないよ。
- 521 名 「その大きなばけものは、わたし▼くらゐもあったかね。
- 521 連 「では、この▼くらゐかね。
- 521 連 「そんなら、この▼くらゐもあったかね。
- 532 動 さつきの筒の中へ、ちゃうど、するするとはいる▼くらゐの大きさに作って、そのはしに、虫めがねをとりつけた。
- 532 動 ちゃうど、めがねの玉が、はまる▼くらゐの大きさに巻いて、その一方のはしに、めがねの玉をはめた。
- 532 連 海の深さが、どの▼くらゐあるか、敵艦までどのくらゐはなれてゐるか、自分の乗つてゐる
- 532 連 敵艦までどの▼くらゐはなれてゐるか、自分の乗つてゐる
- 541 動 そろそろ、汗ばむ▼くらゐ暑い日ざしを受けて、男も、女も、牛も、泥田の中で働きます。
- 541 連 春枝「花子さんは、どの▼くらゐと思ひますか。
- 541 連 正男「どの▼くらゐあると思ふ。
- 541 連 勇「春枝さんは、どの▼くらゐ。
- 542 他 汽車や自動車も、かなはない▼くらゐの早さですから、何百キロの海を、一氣に飛ぶことも、決してふしげではありません。
- 542 副 「動かないものを作るなら、少し▼くらゐ寸法がまちがつても、できることはありません。
- 551 連 この▼くらゐあいきやうのある氣のきいた虫は、めつたにないものだ。
- 552 他 時計が時を刻むのと同じやうに、目に見えない▼くらゐゆつくりした動きで、わくが回轉してゐる。

- 552 名 でも、これ▼くらゐの波に負けるものかと、ともすればころがりさうになるからだを、はめ板や、手すりにつかまつて支へながら、働きました。
- 552 名 これ▼くらゐのこと一一かぎりある身の力ためさん。
- 552 連 しかし、佐吉は、「この▼くらゐのことで弱るものか。
- 561 他 三人の心は、驚きと感激でいっぱいになつて、ただぼうつとして、ひき終つたのも氣づかない▼くらゐ。
- 561 動 大粒の雨が、ものすごい音をたててゴムの葉をたたき、しぶきをあげ、一間先も見えなくなる▼くらゐ降り續く時は、
- 561 動 せまい道の兩側には、大きなささが、ぼくらの頭をおほふ▼くらゐ高く茂つてゐた。
- 131 名 蚕ハ、タイティ、二十五日カラ四十日▼グラキノアヒダ、桑[クワ]ノハヲタベテ、ソノアヒダニ、四ド、ネムリマス。
- 131 名 ハジメハ、小サナ虫デスガ、大キクナルト、ミナサンノ手ノ指▼グラキニナリマス。
- 142 名 子どもが石合戦をしてをつたが、一方の人数は百五十人▼ぐらゐで、ほかの方のは、その倍ほども、あつた。
- 231 名 茶ノ木ノ高サハ大テイ三四尺▼グラキデ、アタヽカイトコロニヨクソダツ木デス。
- 241 動 水ニヌレル▼グラキハ何デモナイコトダ。
- 241 副 西洋紙ハナホマケズニ、「君等ハ水ニヌレルト、スグニベタ@K1ニナルガ、僕等ハ少シ▼グラキ水ニヌレテモ裏ヘハ通ラナイ。
- 241 名 コンナ所ニハ動物モゴクマレデ、植物ハマツタクナイガ、岸ニ近イ浅イ所カラ五十ヒロ▼グラキノ所マデニハ、海草ガハエテキル。
- 242 名 マツチハーダースノ價三四錢▼グラキナレバ、一箱三四厘ニモ足ラズ。
- 331 名 いかな日でも葉書の百枚や封書の三十通▼くらゐは、私の口にはいらないことはありません。
- 332 名 湖の氷が大へんあつくなつた。一尺▼ぐらゐもあらう。

- 341 名 クナイガ、岸ニ近イ淺イ所カラニ三百尺▼グラキノ所マデニハ、海藻が生エテキル。
- 341 名 大連の貿易高は横濱や神戸よりは少し下で、大てい大阪▼ぐらゐだといひます。
- 342 名 高さが四五尺▼ぐらゐで、
- 342 名 かりに造れたとしても、それを十錢▼ぐらゐで賣つてはまうかるまい。
- 342 名 したがつて一包のマツチを十錢▼ぐらゐで賣つても、さうおうにまうかるのである。
- 342 名 マツチはちよつとした物で、價も安く、一包十箱が十錢▼ぐらゐで買はれる。
- 342 名 かまはさしわたしが一丈▼ぐらゐ、高さが四五尺ぐらゐで
- 351 動 何時もはうす暗い程茂り合つてゐる兩がはの木立も、まだ若葉だけに、下草まで見える▼ぐらゐ明るい。
- 351 名 それから又長い間忠實に勤めて、三十▼ぐらゐの時、年來の貯金と主人からもらつた金を資本にして、小さい米屋を始めた。
- 351 名 此の間も十▼ぐらゐの少女が「君が代」をうたつてゐました。
- 351 名 大人の握りこぶし程の大きなものもあれば、雀の卵▼ぐらゐなかはいらしいのもあるが、どれも皆、絹のやうなうすい皮がはち切れさうに、よく實がついてゐる。
- 351 名 其の葉の根本には、大人の頭▼ぐらゐの實がすゝなりになついてゐます。
- 352 動 鳩は一分間に約一キロメートルも飛ぶ力があるから、四五十キロメートルの處を往復して食事する▼ぐらゐは何でも無い。
- 352 名 廣さは二町四方▼ぐらゐで、せり場を中心にして、其の周囲は馬つなぎ場になつています。
- 352 名 さすがの鯨も次第に弱つて、船から五十メートル▼ぐらゐの處まで引寄せられた。
- 352 名 私どもの若い時分には、かういふ仕事になると、あなたの半分▼ぐらゐしか働きませんでした。

- 352 名 中には、君▼ぐらゐの子供や、其のおかあさんらしい人が、今日の別れを惜しんで、泣きながら豆やにんじんをやつたり、くびや背をなでたりしてゐ
- 361 名 ものすごいうなり聲を立てながらのそり@K 1と歩き廻ると、二間幅▼ぐらゐに耕されて行く。
- 361 名 使ひみちによつて、三十年目から五六十年目▼ぐらゐの間に伐るのださうだから、一番早く伐るとしても、其の時は僕がおとうさんくらゐの年になつてゐるわけだ。
- 361 名 殊に日本人の小學校ありて、御前たち▼ぐらゐの子供が通學し居るを見ては、殆ど身の南米に在るを忘れ候。
- 361 名 したがつて二百十日も太陽暦なら大がい九月一日で、ちがつても一日▼ぐらゐのものだが、太陰暦になると三十日もちがふことがある。
- 421 名 小指▼グラキノ大キサデシタ。
- 422 名 この子は、ずん@K 1大きくなつて、三月ほどたつと、一五六▼ぐらゐの美しい娘になりました。
- 431 名 見ル間ニノビテ、二米▼グラキニモナリマシタ。
- 431 名 そつと行つて見ると、二米▼ぐらゐの高さの所に、あぶらせみが一匹止つて居る。
- 431 名 一番後カラハイツテ來タノハ、七十▼グラキノオバアサント、赤チヤンヲオブツタラバサントデシタ。
- 432 名 これで、此のガラスのふたをすると、少しずかして置いても、日中は二十四五度▼ぐらゐになるから、春といふよりも夏だよ。
- 432 名 たつた一米四方▼ぐらゐの廣さですが、こゝばかりは、寒い冬も知らないやうに、緑や、赤や、白や、紫に、美しく照りはえて居ます。
- 432 名 どこかの屋根が、目がねの玉一ぱいに廣がつて、つい四五米▼ぐらゐの所にあるやうに見えるではないか。
- 441 名 中村君は八米▼ぐらゐだと言ひ、石川君は十米以上もあると言ふ。
- 441 名 苗が二十粁▼ぐらゐにのびて、葉先が朝風に軽くゆれる程になると、
- 441 名 卵は、其のまゝで冬を越して、翌年の夏孵るのですが、孵つた時は二耗▼ぐらゐの、小さい、白いうじのやうなものです。

- 441 名 大きい本葉は長さが二纏▼ぐらゐ、小さいものでも一纏ぐらゐはあります。
- 441 名 淡い水の上に二纏か三纏▼ぐらゐ、若々しい緑の苗が出揃つて行くのは、見るから氣持のよいものだ。
- 441 名 大きい本葉は長さが二纏ぐらゐ、小さいものでも 1 纏▼ぐらゐはあります。
- 442 名 此の室の中央に、直徑四五米▼ぐらゐの圓い池があつて、中にたくさんの「いわし」が泳いで居ました。
- 442 名 左右の足を一ぱいにのばしたら、三米▼ぐらゐはあるでせう。
- 442 名 夏の末頃、つばめが、電線や物干竿に五六羽▼ぐらゐ並んで止つて居るのを、よく見かけます。
- 442 名 だから、ダイヤモンドは豆粒▼ぐらゐの大きさの物でも、何千圓、何萬圓といふ高いねだんです。
- 451 名 左は山、右は海、この間を汽車は、しばしば十數米から二十米▼ぐらゐの高さの山腹を縫つて走ります。
- 451 名 寫眞機を北極星に向けて、一時間▼ぐらゐふたをあけて置くと、此の圓をゑがく様子がわかるやうに寫眞にうつります。
- 451 名 大人の握りこぶし程の大きさのものあれば、雀の卵▼ぐらゐな、かはいららしいのもあるが、どれも皆、絹のやうなうすい皮がはち切れさうに、よく實がついてゐる。
- 451 名 大きな犬▼ぐらゐの大きさで、肢はばかにひよろ長く見えます。
- 452 名 皆は、ちよつと顔を見合はせましたが、「十二三日▼ぐらゐはございませう。
- 461 名 月から地球を見るとすると、我々が常に見る月の四倍▼ぐらゐな地球が、天にかゝつて見えるわけです。
- 461 名 高さは六百米▼ぐらゐですから、全く手に取れさうに見えます。
- 461 名 もう、あなた▼ぐらゐになれば、もつともつと大人しいはずです。
- 461 名 だから、此の塔▼ぐらゐ、どつしりと落着いて見えるものはない。
- 462 名 算木といふのは、長さ四五纏▼ぐらゐの四角柱の木である。

- 521 名 二十センチ▼ぐらゐにのびたいねの苗を、田にきちんととうゑるのです。
- 522 名 三月ほどたつと、もう十七八▼ぐらゐのむすめに見えました。
- 531 名 決勝線まで、わづか二百メートル▼ぐらゐになりました。
- 531 名 いちばんあとからはいって来たのは、七十▼ぐらゐのおばあさんと、赤ちゃんをおぶったをばさんとでした。
- 531 名 そっと行って見ると、一メートル半▼ぐらゐの高さ
- 531 名 先生が、「みみず▼ぐらゐに、どうしてそんな聲をたてるのです。
- 532 名 このガラスのふたをすると、少しずかしておいても、日中は、二十四五度▼ぐらゐになるから、春といふよりは夏だよ。
- 532 名 たった一メートル四方▼ぐらゐの廣さですが、ここばかりは、寒い冬も知らないやうに、みどりの葉が生き生きして、赤や、白や、むらさきの花が、美しく咲いてゐます。
- 541 名 」勇「さあ、十四メートル▼ぐらゐかな。
- 541 名 十メートル▼ぐらゐかしら。
- 541 名 苗が、二十センチ▼ぐらゐにのびて、葉先が、朝風にかるくゆれるやうになると、
- 541 名 糸は、一センチ、二センチと、見るまに延びて、二メートル▼ぐらゐになりました。
- 541 名 三センチ▼ぐらゐのあさりでした。
- 541 名 卵は、そのまで冬を越して、あくる年の夏かへるのですが、その時は、二ミリ▼ぐらゐの小さな、白いうじのやうなものです。
- 541 名 淺い水の上に、二センチか三センチ▼ぐらゐの、若々しいみどりの苗が出そろつて行くのは、見ただけでも氣持のよいものです。
- 541 名 臺灣は、明治以來日本の領土になりましたが、今から三百二十年▼ぐらゐ前までは、まだどこの國のものともきまつてゐませんでした。
- 542 名 この室の中央に、直徑五メートル▼ぐらゐの、まるい池があつて、中に、たくさんの「いわし」が泳いでゐました。
- 542 名 その機械のそばには、高等科を卒業して二三年▼ぐらゐの、若い職工さんもゐて、油を

- 542 名 左右の足をいつぱいに延ばしたら、三メートル▼ぐらゐはあるでせう。
- 542 名 夏の末ごろ、燕が、電線や物干竿に、五六羽▼ぐらゐ並んで止つてゐるのを、よく見かけます。
- 551 名 その中にたつた一人、色のあまり黒くない、十歳▼ぐらゐのかはいい少女が、日の丸の旗を振りながら、「萬歳。
- 551 名 写真機を北極星に向けて、一時間▼ぐらゐふたをあけておくと、この圓をゑがくやうす
- 551 名 大きな犬▼ぐらゐの大きさで、足は、ばかにひよろ長く見えます。
- 552 名 月から地球を見るとすると、われわれが常に見る月の四倍▼ぐらゐな地球が、天にかかつて見えるわけです。
- 552 名 乾かさうと思へば、半日▼ぐらゐでも乾きますが、早く乾かし過ぎると、あとでちぢんで、しづができたり、干割れがしたりします。
- 552 名 プリンスーオブーウェールズは、中央と艦尾から煙を吐きながら、八ノット▼ぐらゐの速力で走つてゐた。
- 552 名 患者は半數▼ぐらゐよつて、ところどころに置いてある吸ひがら入れに、吐く音が聞こえます。
- 561 名 汽船に乗つて、わが南洋のトラック島を出發し、眞南へくだつて行くと、一日半▼ぐらゐで赤道に達する。
- 561 名 高さは五百メートル▼ぐらゐですから、まつたく手に取れさうに見えます。
- 561 名 それは、明け方になるにつれて激しく、夜明け前の二時間▼ぐらゐに最高潮に達する。
- 561 名 部落全體は、高さ一丈▼ぐらゐの竹で作つた床の上にできてゐる。
- 561 名 それからまた一日半▼ぐらゐ南へ航海を續けると、一つの島が見えて來る。
- 561 名 もうあなた▼ぐらゐになれば、もつともつとおとなしいはずです。
- 561 名 南洋りんごと呼ばれる小さなトマト▼ぐらゐの大きさの實の生つてゐる木が、早くたべてくださいといはんばかりに、往來まで枝をさしのべてゐる。

- 561 名 一萬トン級の船が百五十隻▼ぐらゐはらくにはいれる。
- 562 名 近づいて見ると、五千トン▼ぐらゐの商船だが、國旗を掲げてゐない。
- 562 名 五月から八月までは、風速二十メートル▼ぐらゐの南西季節風が、